

# 「よろい研究会」と博物館活動

藍野 かおり

みなとびあの「たいけんのひろば」の特色の一つは、週末ごとに行われるたいけんプログラムです。たいけんプログラムは、歴史・文化・人々のくらし・博物館の活動など、当館の設置目的に関わる分野からテーマを設定し、子どもから大人まで、参加者が博物館ならではの体験活動を通して学びを得る事を目標に企画運営しています。これに深く関わっているのが「たいけんのひろばボランティア」のスタッフの皆さんです。たいけんプログラム実施時の参加者サポートをはじめ、菓子箱を使って簡易な織り器をつくり、織りの仕組みを学びながら、さきおりコースターを作る「布を織ってみよう」や、ワラからパイプを抽出し、紙づくりを体験する「わら紙づくり」など、ボランティアスタッフが企画運営するプログラムで活躍しています。また、自然体験や手芸など、それぞれの得意分野をプログラム化し、実施するなど、個々の強みを活かしています。

また、たいけんのひろばでのボランティアスタッフの活動で特徴的なのが、「●●研究会」あるいは「●●プロジェクト」と銘打った、ボランティア有志の活動です。

これは、具体的なたいけんプログラムの企画にむけて、その内容に興味を持った有志が集まり、プログラムの実施に向けて練り上げていく、いわば、プログラムの種をまき、みんなで育てる活動です。漠然とたいけんのひろばという場でやってみたいことがある人、アイデアがある人の想いを、皆で支えて形にしていく、ということをしつつではあります。二〇〇四年のボランティア活動開始当初から行っています。

## 「よろい研究会」の発足

みなとびあたいけんプログラムの一つに「カブトを折ってみよう」というものがあります。これは、大きな紙を

使った折り紙で人がかぶれるサイズの兜をつくる、というものです。折り方が少し複雑ですが、出来上がった形が華やかなので、参加者には好評を得ています。兜ということで、端午の節句にちなみ、五月上旬の定番プログラムになっています。

このプログラムをサポートしていたボランティアスタッフから、「兜を紙で折っておしまいではなくて、最近のコスプレの流行も踏まえ、鎧を身に付けて、記念撮影してもらおう」というコミが期待できないだろうか」という提案がありました。これがきっかけで、鎧をつくるプロジェクト、「よろい研究会」が発足しました。

とはいえ、甲冑は節句には飾るけれど、鎧のことはよく知らない、という者たちばかり。そうした不安をかかえながら、研究会はスタートしたのでした。どんな鎧にするのか、材料はどうするのか、一から皆で考えることから始まりました。研究会として決めた方針は、①経費削減のため、身近な材料をリサイクルして作る ②「カブトを折ってみよう」に参加してくれる子どもにも合わせた大きさのものを作る ③簡単に着脱できるようにする ④作る過程



写真1 初代よろいを参加者に着用してもらっている様子

部を保護する部分をどのように取り付けるかでした。威しと呼ばれる装飾をかねた紐での取り付けは、長さを一定にし、バランスよく配置しなければなりません。そのためどうするか、みんなでアイデアを出し、何度もナイロン紐で実験・練習を繰り返して完成イメージを共有しながら、製作を進めました。ようやく出来上がった鎧は、実用的な面から、肩の部分に面ファスナーを張り付け、着脱を簡易にしました(写真①)。

## 次なるステップと開港一五〇年

初代の鎧をつくり、「カブトを折ってみよう」のプログラムが実施されたあと、今後のよろい研究会の方向性が話し合われました。子ども向けのプログラムで使用するものだから多少違うところがあったとしても実用性を重視するべきという考えと、歴史博物館として、より実物に近いレプリカづくりを目指すべきという考えが出されました。どちらも一理あるものです。話し合いの中で、「今回は子どものサイズのものを作ったけれども、本来、鎧は大人サイズで作られていたものであり、本物により近いものを作ろうとすることで、いろいろと見えてくることがあるのではないか」という意見が出されました。また、つくるのであれば、有名な武将の鎧のレプリカづくりでは、みなとび

あならではの活動といえないのでは、という疑問や、さらに、二〇一九年に開港一五〇年を迎えることから、これをバックアップする活動にしたい、というアイデアが出されました。こういったことから、収蔵資料である川村家伝来の「紺糸素懸威腹巻」のレプリカを、身近な材料を用いて作ろうというチャレンジが始まりました。

レプリカづくりの第一歩として、まず大人サイズの鎧を作ることになりました。製作の過程で、鎧の素材感をどのような材料で再現するかが検討されました。黒いビニールテープを表面に張り付けてつや感を再現したり、塗料や仕上げ剤も何種類か試しながら、鎧を一体仕上げました。

これと並行して、実物の実測、撮影、観察を行いました。鎧の各部をさまざまな角度から撮影し、製作時の参考資料としました(写真②)。



写真2 紺糸素懸威腹巻 実測の様子

このような過程を経て、紺糸素懸威腹巻のレプリカよろいづくりが進行しました。実測の結果をもとに、段ボールで土台を作り、小札風に見せるために、牛乳パックを切って重ね合わせ、障子紙を張りつけました。漆を塗った皮のような質感になるよう、耐水性のある絵の具を塗った後、薄めた木工ボンドでつや出しをしたり、立体的に仕上げるために霧吹きで湿らせながら丸曲した形にするなど工夫が凝らされました。

さらに、鎧の完成後、兜もあった方がよいとのことで、不用品のヘルメットを土台にして兜が製作されたのでした。研究会が発足して、足掛け五年、ボランティアスタッフがまいた種が、大きな成果となりました(写真③)。

## 今後の展開

よろい研究会では、身近な材料での鎧づくりの工夫をしてきました。集大成となった、紺糸素懸威腹巻レプリカ



写真3 完成した「紺糸素懸威腹巻」レプリカ

づくりをはじめ、歴代の鎧づくりを通して、身近な材料で鎧を作るノウハウが蓄積されています。これを活かして、来年の五月に向け、あと二〜三体、子ども用やデザインの違いを工夫して、プログラム実施の際にお客さんに楽しんでほしい、という意見が出ました。これを受け、よろい研究会は発展的に解消し、今度は「よろい工房」と銘打って、研究会のメンバーを中心に、より多くのボランティアスタッフに参加してもらいながら、モノづくりにシフトした活動を行おうとしています。

この、よろい工房での活動を通して、次の活動のタネが生まれるかもしれません。また、研究会で行ってきたこれまでの試行錯誤や、よろいについて調べてきたことなどをモチーフにしたたいけんプログラムやたいけんのひろばでの展示なども検討できそうです。

次はどんなアイデアが形になっていくのか、近い将来、また皆さんにご紹介できればと思います。

(あいの かおり 学芸員)

で武器としての目的や構造も理解する、の四点でした。

この方針を受け、段ボール製の二枚胴の鎧をつくることになりました。

## 鎧の製作が始まる

他館の展覧会図録や、甲冑研究の入門書、インターネット上での手作り甲冑の作り方を参考にしながら、設計図を作り、試行錯誤を繰り返しながら、段ボールを裁断し、ポスターカラーで着色、ニスで硬化・つや出しという流れで製作しました。ここでネックとなったのは、草摺と呼ばれる大腿